トップインタビュー

今回のトップインタビューは、「金とまぐろのまち」いちき串木野市を象徴する企業の三井串木野鉱山（株）中村社長にお話しを伺いました。

Q　社長として着任され久しいですが、以前と比べまちの雰囲気や印象は変わったでしょうか？

A　今回着任して四年経ちましたが、前回の離任からは十三年になります。以前より人通りが少ないように感じますが、建物や道路が随分きれいになったと思います。

　串木野インターができ、空港や鹿児島市へ出かけるのが便利になりました。

　商工会議所は、危機感を持って活発に活動されるようになったと思います。

　合併により、旧市来町が身近に感じられるようになって来ましたが、市来、串木野の一体化を促進するためにも、祭などの行事への相互参加を進めて欲しいです。

　以前もですが、私にとって本市での生活で感じている魅力というのは、「交通渋滞がない。病院であまり待たされない。飲み屋で席が窮屈でない。勤勉で穏やかな人々。職住接近。焼酎がうまい。冬暖かい。海がすぐそば。温泉が多い。高齢者がイキイキしている。空気がきれい。緑が多い。農産物が身近にある。鹿児島市や空港まで一時間弱と近い。ゴルフ場の予約が取りやすく低価格。パークゴルフも手軽で結構。」など。さすがに梅雨時の百足には閉口しますが、トータルでは大変快適に過ごさせていただいておりますし、このような土地で永く過ごされる地元の方々をうらやましく思います。

Q　素朴な質問ですが、なぜ、鹿児島県に金鉱床が多いのでしょうか？

A　現在までの通算産金量は、鹿児島県は他県を押さえてでダントツとなっています。次は北海道、ついで新潟です。

　国内鉱山別通算産金量ランキングでは、鹿児島県の金山は、一位菱刈、四位串木野、七位山ヶ野、九位大口が上位に入っています。現在、日本で採掘中の金山は五つありますが全て鹿児島県です。（菱刈、串木野、春日、岩戸、赤石）

　串木野金山は四百万年前に、菱刈金山は九十万年前にできました。いずれも国内の金山としては、若い方に分類されます。錦江湾の海底では、今まさに鉱床ができつつある現象が発見されています。自然のなせる業ですが、鹿児島県や北海道などは金鉱床ができやすい地質に恵まれているといえます。

【赤石鉱山・露天掘りの採掘】

Q　串木野鉱山は、三百五十年以上の歴史をもち、これまでの累積産出量は金六十二トン、銀百三十二トンにのぼると聞いていますが。金銀の製錬方法について教えて頂けますか。

A　金銀はシアンという化学物質を含む溶液に溶けやすい性質があります。そこで、金鉱石を砕いて泥状になるまですりつぶしてシアン溶液に浸すと、じわじわと金銀が液に溶け出します。

　これをろ過して、金銀の溶けた液に亜鉛の粉末を入れると、亜鉛が溶けて、替わりに金銀が泥状の澱物となって出てきます。この澱物を約二千度の炉で焼くと、金銀合金の延べ棒ができます。

　最後にこれを電気分解すると、純度の高い金と銀の延べ棒となります。

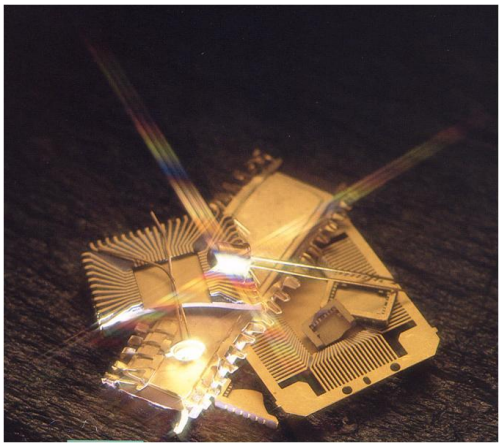
　以上を全泥青化製錬法といいます。三井串木野では大正三年（一九一四）から現在まで、ほぼ同じ方式の青化製錬工場が稼動しています。

　昔（江戸から明治の頃まで）は、金鉱石を水車ですりつぶして水銀に金を吸収させたのち、過熱して水銀を蒸発させて金を採収する混汞法（こんこうほう＝アマルガム法）を用いていました。今でもアマゾン川奥地などで行われています。

【青化ソーダによる金銀の溶解抽出】

Q　資源の乏しい我が国でありますが、身近な電化製品や携帯電話等に使われている希少金属が、今この「都市鉱山」でリサイクルシステムを有効活用することが存在感を高めていますが、様々

な金属を分離・回収するのに蓄積された製錬技術や設備が役立っているのですね。



【リサイクルの原料となる電子部品】

A　三井串木野では、大正三年から青化製煉工場において金鉱石から金銀を回収してきました。昭和五十三年（一九七八）には、同じ原理を応用した新設備を導入し、電子部品などからの金銀リサイクルを開始しました。リサイクル原料の種類によっては、従来の青化製錬工場で金鉱石と一緒に処理しています。

　都市鉱山という言葉が最近は随分と有名になりましたが、今では当社で処理している金量の半分以上が、都市鉱山から生み出されるリサイクル原料から得られています。

　今では、金銀のほかに、銅、白金、インジウム、パラジウム、ニッケルなどの非鉄金属やレアメタルも回収しています。

Q　本市の地域経済についていかが思われますか。

A　本市の恵まれた自然環境や交通面での利便性を考えれば、鹿児島市のベッドタウンとして十分に発展していく要素があるような気がします。特に降灰の影響が少ないのが大きな長所でしょう。また、保育園をはじめ教育施設に余裕があり、病院のベッド数にも余裕があるように見受けられますが、子育てや高齢者の生活の場として、大変魅力的な街ではないかと思います。子育てと高齢者にターゲットを絞ったベッドタウンを志向することも検討されてはいかがでしょうか。

　また、街を挙げて進められている「食のまち」は大いに盛り上げて頂きたいと思います。ただ、三号線を走っていると、いつの間にか通り過ぎてしまい、つけあげ店以外は「食のまち」らしい施設は気が付かないことが多いと思われます。まぐろの街でもある串木野へ行けば、定着してきた「まぐろラーメン」のほかに、「うまいまぐろの刺身」とか、「まぐろ丼」といった定番を食事できる店が、市外の方にも容易に見つけられる形にならないものかと思います。

Q　その他、何かございましたらお願いいたします。

A　明治三十九年以来今年で百四年間、三井は地元にお世話になってきました。

　戦前の最盛期には社員数約二千人を数え、串木野は「金とまぐろの街」として賑わっていました。現在、社員は九十名程度、大半は地元いちき串木野市民です。

　現在、串木野鉱山から産出する金鉱石は僅かな量ですが、菱刈金鉱石やリサイクル原料からの貴金属回収、さらには知覧の赤石鉱山の採掘を盛んに行っています。これからも堅実な経営を続け、雇用、納税、地元企業との連携などの面から末永く地元と関わって行きたいと思いますので、引き続きよろしくご支援をお願い申し上げます。

　なお、会社の高台には、昭和五年に作られた三井観音公園があり、「市民との架け橋となることを祈って作られた」福徳観音像と東郷平八郎伯爵揮毫の石碑があります。ここからは市街地や東シナ海を一望できる絶景の地となっています。昼間は一般市民の方にも開放しておりますので、どうぞご遠慮なくご利用下さい。